

円爾弁円における「禪」の意味と「仏心宗」の位置づけ

加藤 みち子

日本仏教史上における円爾の思想的立場について検討するためには、先ず、円爾のいう「禪」とはいかなる意味なのか、その禪によって立つという「仏心宗」が余宗との関係でいかなる位置づけにあるのかを確認することが重要となる。本報告は、そのための一試論である。

円爾弁円の「禪」の全体像を理解するために、分析概念として、仮に「三つのレベル」を設定した。三つのレベルとは第一に「仏心」としての「禪」、第二に「門」としての「禪」、第三に「宗」としての「禪」である。これらが一体となったところ、すなわち、根源としての仏心とそこから出る教門およびそこに入る観門という作用をも含み、さらにこのことを前提として、「仏心」に直入する「直指

人心見性成仏」の「方法」を円爾は「坐禪の宗門＝禪」と呼ぶのである。

この立場によれば、「仏心」に入る方法であるかぎりどの「宗」も「仏心宗」であり、その意味で「諸宗」は平等と看做される。但し、衆生の能力にあわせた方法としての差異があり、その中で最も「仏心」に近い方法が「天台宗の観門」と「真言宗の観門」と「仏心宗の直指人心見性成仏」であるとし、それら三者が同等であるとみている。又、この「仏心宗」という方法によって入る「仏心」は「自性清浄心」とも「阿字本不生際」ともよばれるものであり、「仏心宗」の行者を「密宗の頓行者」に位置づけていることから、教理の核心部分において円爾の禪は密教教理の核

心と一致するとみてよいだろう。

従って、円爾の立場は、従来言われてきたような「妥協的に密教を修するが宋代臨済宗の坐禅を主眼とする人」でも「坐禅宗を取り入れた台密の人」でもなく、独自の仕方で積極的に「禅密一致の禅」の立場であり、従って、密教的理論とは無縁の中国宋代の臨済禅とは一線を画するものである。このような形で円爾が、「禅の名のもとに密教理論を取り込んだ」ことは、日本禅の基本的体質ともいえるべき密教的傾向を考えると、きわめて重要な意義を持つといえるだろう。

(学習院大学非常勤講師)